

研究生活を振り返って

花卉園芸学研究室博士前期課程2年

近 藤 悠

今年は近年稀に見る高温であり、私たち人間はもちろん植物も悲鳴を上げているのが聞こえてくるような夏でした。そんな夏もいつの間にやら身を潜め、やっと涼しい季節がやってくるのかと喜ぶと同時に、私自身の生活も植物と同調しているのか、日照時間の減少に伴う活力の落ちを感じながら、本稿の執筆を行っています。

花卉研の近況

私が研究室に入ったのは、ちょうど3年前のこととなります。毎年研究室メンバーの入れ替わりがあるため、どの年も年ごとのカラーがあり思い入れの深いものとなっています。今回は、近年の花卉研の様子を報告させていただければと思っています。

現在、松戸の花卉研究室は教員3人と新しい3年生を含めた学生10人で活動を行っています。研究テーマはランやダリア、フロックス、カーネーション、などなど花に関わる様々な現象を種々の手法を用いて研究しています。鑑賞価値があるものを全て花だと言ってしまえば、どんな植物でも研究対象にできるのがこの研究室の魅力であり、当然、研究手法も様々であるため、他人の研究で受ける刺激を日々感じる飽きない研究室です。

そして、やはり外すことのできないキーワードが「フィールドからDNAまで」という言葉です。近年、DNAを含む遺伝子解析など多くの研究が行われており、実験室はたくさんの機械に囲まれマイクロ単位の細かい作業が求められます。しかしそういった研究も健全に育てられた植物材料があってこそ。それは今も昔も変わらず、植物をうまく育てられてやっと研究のスタートラインに立てるのではないのでしょうか。しかし、しゃべらない植物を相手にするのもなかなか難儀なことです。多くの学生が、研究室に入った当初はなれない植物管理に四苦八苦し、枯らした植物は数知れずといったところではないのでしょうか。しかし、多くの植物を枯らし、月日を経るごとにどんどん栽培は上達していき、そこから実験がうまくいくようになってくというのが花卉研の伝統だと感じています。DNAに行くためには、まずフィールドからと花卉研では地道な土台作りが必要なのです。新しい3年生も入ってきますが、ほんの少しの先輩として、枯らす植物が少なく済むようにフォローしていければと考えている今日この頃であります。

片付けの年

花卉研といえば共同作業も重要な活動の一環です。広い圃場を持つため草刈りやハウスの整備などに関しては週に1、2回共同で作業を行っています。その中でも今年の作業といえば「片付け」が思い浮かびます。図書館のある棟の改修に伴う研究室の移動、圃場の奥深くや試料を保管する冷凍庫など、こんなにも片付けの多かった年は近年でもないのではないのでしょうか。

いざ片づけを始めると40年前のクマガイソウの種子や数十年前の植物標本、数百に及ぶ色素サンプルなど遺産が続々と出てきます。そういった大先輩方の研究生活を垣間見て、花卉研の伝統を感じながら、大量に廃棄や整理を行っていききました。作業の中で、先輩たちがもっと整理して卒業してくれればと思うことも間々ありましたが、自分が当事者となったら勿体無く捨てられない植物サンプルがいっぱいあるのだろうなと感じています。こうして、区切りとして片づけをしたものの、また徐々に捨てられないものは蓄積していきます。今度私の遺物を片付けるのは何年後の後輩になるのだろうか、とまだ見ぬ後輩に、すでに申し訳なさを感じています。

最後に

今年度も後半戦に入り、新3年生の参加や修論や卒論のまとめなど、変化も多く忙しい季節になっていきます。しかしこういった時期だからこそ、自己研鑽に励み、伝統のある花卉研の一端を担うことができるように、花卉研一同、研究生活に邁進していきたいと思っています。今後とも未熟な学生たちへの温かいご指導、ご支援宜しくお願い致します。



研究室メンバーで花を活ける